

十文字学園女子大学講演会

『新しい時代を生きる子どもをどう育てるか』

—教育における発想の転換— (2)

首藤 美香子 編

今回は、お茶の水女子大学附属幼稚園で堀合先生の保育実践を間近でご覧になられていた本田和子先生から、堀合先生が従来の保育のあり方から方向転換しようとして試行錯誤されていた当時のエピソードをご披露いただくとともに、その「実感」が確かなものであった

前回は、保育実践六十年の間に「子どもが変わった」という堀合文字先生の「実感」と、それゆえに日々の実践のあり方を現代の子どもに合うものにするにはどうすればよいか、についての貴重な問題提議をご紹介しました。

ことを、歴史社会的な事実から立証していただきました。すなわち、一九七〇年～一九八〇年代にかけては、日本の子どもの歴史上、大きな分岐点にあたり、その後少子化傾向と生活環境の構造的変化、学歴信仰が顕著となつて、大人と子どもの関係が変化を余儀なくされたというものです。さらに本田先生は、現代では子どもに対して不寛容な『子ども嫌い』の心性が形成されつつある懸念を示唆されました。

少子化問題については政府間で様々な議論と対策が試みられていますが、少子化社会が「子ども自身」にとってどのような影響をもたらすか、「子どもの育ち」という観点からの検討は全くといっていいほど試みられてこなかったといえます。「子どもの問題」に対して「子ども」からの視点が欠落している現況を鋭く指摘され、子どもの数が少ない、子どもにとって生きがたいともいえる社会の中で、子どもが自ら育つ力をどう支えていくか、大人と子どもは新たにどんな関係を結びながら心を通い合わせていくか、本田先生のご提

案は、保育者に限らず、子どもと生きようとするすべての人にとって、非常に有意義なものといえるのではないのでしょうか。

#### 〈本田先生講演〉

堀合先生は、長い六十年にも及ぶご経験で蓄えられたものを、一滴一滴、絞り出すようにお話しくださいました。そのエキスには、苦いものも入っていたような気もいたしますけれども、私どもがどれくらい受けとめることができたのか、特に、私はどのくらい受けとめることができたのか、心もとなく思います。

#### 堀合先生の保育が変わった頃のこと

今のお話をうかがいながら、堀合先生が保育をお変えになろうとしたある時期に、堀合先生の保育を附属幼稚園で拝見していたことを思い出しました。多分、一九七〇年から一九八〇年くらいの間だったかと思えます。それまで、堀合先生は「お茶の水式の誘導保育

の名人」と言われていらした方です。「お茶の水式の誘導保育」はちよつと意味が誤解されているようですが、けれども、まあ二〜三ヶ月にわたる長いタイムスパンの中で、子どもたちがいろいろな活動をはじめます。その活動を上手に先生が援助しながら、方向づけをし、ひとつのテーマに収れんしていく。そして結果としては、例えば立派に動物園ができあがり、動物園ごっこをするとか、そういう保育でございました。なぜか、「お茶の水方式の保育」として有名になっておりまして、それを見事になさるお方が堀合先生でいらしたわけです。

ところが、ある時点で、少しずつ変わっていらしたわけです。お変えになった瞬間というところと大げさですが、お変えになったあたりを観察させていただいたことがございました。例えば、空き箱をたくさんお集めになって、その長方形の空き箱を上手にセロテープでつないで積み上げていくわけです。いわば、レンガを積み上げていく形になります。「レンガのお家でもお

作りになるのかしら」と拝見してましたら、せつせとそういうことをなさるのです。だんだん、レンガのお家が完成されてまいります。私は「ああそうか、レンガのお家を子どもと一緒に作りになって、例えば三匹のこぶたごっこでもなさるのかしら」と何となく思っております。けれども、そのお家みたいなものは壁みたいなのができ上がった時点で、堀合先生は作業を止めておしまいになりました。そして、そこにできあがったものはそれで置いておしまいになった。お部屋の隅に、ちゃんと大きなものが置いてあるわけです。子どもたちは時々そこに入ったり潜ったりして遊びましたけれど、それ以上に私たちが考えているような展開というのは、子どもの中にも起こらなかったし、先生も敢えてそのようなことをなさらなかったわけです。

### 「子どもが変わった」という堀合先生の実感

堀合名人がなさることとは、ちよつと違っていたよ

うな気がしたものですから、そのことをうかがったことがございました。覚えていらっしやるかどうか分かりませぬけれど。その時先生は、こういうことをおっしゃったんです。

「これね、昔のお子さんだったら、私がちよつとこういうことをすると、何となく子どもたちがのつてきて、ムンムンするような熱気が伝わってきて、そして子どもたち自ら流れができるようにして目標がでてる。例えば、『ねえ、三匹のこぶたの一番小さいお家みたいね』とちよつと投げかけると、そこから、『三匹のこぶたの世界』が展開していく、そういうことが、かつてはあったんだけれども、今の子どもはちよつと違うのよ、ということをおっしゃった。「私が生懸命やっていると、(子どもたちは)何かそばにきて手伝ってはくれるけれども、自分たちが興味をもってやっているのとはどうも違う。『先生が何か一生懸命やっているから、少し手伝わなきゃ悪いんじゃない』、っていう感じで子どもたちが手伝ってくれる。

これはどうも違うのじゃないか。自分が子どもの気持ちを誘導することができなくなって、子どもの行動だけを引っ張っているような気がしはじめたので、こういう活動はダメかと思つて止めた。私は、こういうことは子どもを引っ張ることだと思つてなかつたんだけれども、子どもを引っ張ることに、どうもなつてしまっているみたいよ」ということをおっしゃったのです。そして、「たぶん、お子さんが変わつちやつたのかもかもしれないわ」とおっしゃいました。「そんなものかな」という程度にしか思つていなかったのですが、今振り返つてみますと、一九七〇年〜一九八〇年という時代は、ひとつの子どもの歴史の中で、印をつけてもいい時代ではないかと思ひます。このあたりのごことを今日はお話し申し上げてみようかと思ひうのです。

### 日本の子どもの歴史の転換期一九七〇年〜

#### 一九八〇年 ① 少子化のはじまり

まず、一九七〇年というのはどういう時代だったか

という、それまでは子どもが非常にたくさん生まれてきたわけです。「子どもの生まれ方が落ち着いた」、というのはおかしいのですけれども、「沈静化した時代」で、合計特殊出生率（妊娠可能な十五〜四十九歳のすべての女性が、子どもを産むと仮定した時の子どもの数の平均）が、一九七〇年というのはちょうど二・一三人になった時代なのです。それ以前には三・〇とか数値が高かったのですね。でも二・一三というのはどうということかという、一組の夫婦が、二人くらいしか子どもを作らないということになる。ただし、二・一くらい子どもができておきますと、人口は大体安定してくる。ところが五年経って一九七五年になりますと、一・九一人になりました。つまり二を割ってしまったのです。以後、日本の出生率が下がりはじめたので、今年あたり一・二九とか一・二七とか騒いでおりますよね。二を超えることがなくなつてしまった。ちょうどそういう境目であるわけです。少子化のはじまりの時期です。少子化がはじまる、とはど



ういうことか、ちょっと考えてみたいと思います。少子化というのは今、政府筋で大騒ぎしていますね。二・一を割ったあたりから政府は騒ぎをはじめまして、『エンゼルプラン』なんていうのを作りました。それがあまり成功しないと言っているので、『新・エンゼルプラン』を作りました。それとも成功しないといので、今年は『次世代育成支援法』というものを作りましたね。そして、各企業などに次世代を育成するための、子育ての支援を義務づけるということを行いました。とにかく躍起になって、あの手この手としているんですが、子どもはなかなか増えてくれない、生まれてくれないわけです。そして、政府筋でなぜそのくらい大騒ぎするかといえ、これは言うまで

も無く将来の労働力を確保できないからです。つまり、高齢者だけが増えてしまつて、日本の税制を支えている労働人口、言い換えると納税人口が減つてしまふ。それは、結果として非常に国力の減退につながる。日本はもうこのままでは衰退の一途をたどるのではないか、というわけで非常に慌ててはじめてたわけです。これも勿論あります。子どもが、どんどん減つてしまえば、そして将来の社会を支える人たちがいなくなつてしまえば、たぶん日本の国力は今よりもっともつと衰えるだろうと思います。ただし、私たちは子どもの立場からちよつと考へてみたい。

### 子どもの立場からみた少子化問題

#### 『子どもに対して寛容でない社会』の出現

少子化というのは、将来の労働人口の問題としてだけ不安なのだろうか。そうじゃなくて、今生きている子どもたちにも、非常に大きな影響を与えるのではないか、ということですよ。

確かにそれは大きな影響として子どもの生活に出てきているわけです。例えば、よく言われるような子ども同士、お友だちが少なくなる、兄弟が少なくなるから、子ども時代に子どもらしい遊びをすることができないままに育つ。これは、非常に素朴な、少子化が子どもに与える影響の捉え方です。

そして結果としてどうなるかというと、子どもとして「ガヤガヤワイワイ」遊んだことがない人が成長していきます。そうしますと、周りに「ガヤガヤワイワイ」するものを許しにくいメンタリティー、心が育つわけです。これは当たり前だろうと思います。周りに子どもが「ごちゃごちゃごちゃ」いて、絶えず「ワイワイガヤガヤ」やっていると、私たちもその「ワイワイガヤガヤ」に対する許容性が育ちます。寛容になるのです。ほつといてもそのうち静かになるでしょう。「という気持ちになれるのです。ところが、「ワイワイガヤガヤ」があまりない環境で育ちますと、「ワイワイガヤガヤ」に耐えられなくなるわけです。そう

しますと、『子どもに対して寛容ではない社会』というのが形成されます。今の社会はたぶん、『子どもに対して極めて寛容ではない社会』だろうと思います。

それからもう少し極端な言い方をすれば、だんだん、日本は『子ども嫌いの社会』に移行していくのではないか。こういうことを子ども研究者である私がいいますと、皆さん嫌がるのです。「あなた、そんなこと言っちゃいけない。日本人は子どもを愛せるって言いなさい」、って言うんですけれども、だんだん、だんだん、『子ども嫌い』になってくるんじゃないかと、見ていると、思ったりいたします。

### 『子ども嫌い』の感受性の増殖と悪循環

例えば、今、虐待というのが目立ちます。ごく普通の若い母親や父親が、子どもを殺してしまったりいたします。そして、その殺した原因というのが極めて単純なのです。食事をさせようと思っただけで食べさせてくれない。そして、叱りつけて食事を与えなかつ

た。そしたら餓死してしまった。まことに単純なのですね。それから、自分が寝ようと思ったのに、うるさく騒いで自分の睡眠を妨害する。だから、うるさいから外に出して放っておいた。そしたら、大変寒い日で凍え死んでしまった。

こんなことって、ちょっと考えられない気持ちもいたします。けれども、考えられないことが起こりはじめているということは、「子どものな物に対して極めて不寛容な感受性」が育っていて、そういう人が、少しずつ少しずつ増え続けているということにもなるのではないか。そして、少子化というのが回り回って「子ども嫌いの人」を生んで、「子ども嫌いの人」が、子どもは面倒くさいから作りたくないといつて、ますます少子化が進んでという悪循環が起こりはじめているのかな、と思ったりいたします。

確かに今、「子どもは持たなくてもいいわ」、という若い夫婦が増えている。ということは、子どもが「人生の非常に重要な一つの価値である」、「子どもを産む

こと、子育てをすることが、人生の価値である」という考え方が、いつのまにか無くなってしまつて、「子どもがいない人生をちゃんと充実して生きていることもいいんじゃない」、という考え方が増殖しはじめている。

「子どもはいてもいなくてもいい」、それからもう少し積極的に言えば、「子どももって面倒くさい、子どももって自分の生活の邪魔をする存在だ」という方に気持ちが起こつていくわけですね。そういう気持ちがあるのだから、少子化というものがあるのだらうと思います。

### 戦前の子ども時代

私は戦前の人間でございますから、戦前の子ども時代をよく振り返つたりいたします。私のところは、日本の平均で、四人兄弟でした。当時の日本の一家の子ども数というのが四人だった。四人で育つたが、私の母は平均どおり産むくらいまじめな人だったものだから、子育ても真面目にいたしました。かなりき

ちつと、教育ママの走りみたいな感じで、きちつと育てられました。ところが、お隣に、九人男のお子さんのいるお宅があつたんです。そこは『子どもの天国』でした。

私は、(母が) 四人の子どもを産んで四人の子どもをきちんと育てたものですから、結構しつけなども厳しかったものです。裸足で上がつたりするとすぐ叱られて、お風呂場に連れて行かれて、ジャブジャブと洗わされるとか、泥んこになつて帰ると、泥んこじゃなくて、ちょっと白いエプロンに泥がついて帰ると、直ぐにエプロンを脱がされて、母はすぐに洗濯機のない時代ですから盥の中に入れておちこんで、私に新しいのを着せて、何回も何回もそれをして、そのうちに母の方もあきれて、「これ以上汚してきたら、もうあなた着がえるものがありませんよ、今度はパジャマですよ」、と言われたりしたことがあつた。そういう人だったんです。

—次号へ続く—